

生態学辞典

増補改訂版

沼田真一編

築地書館

生態学辞典

増補改訂版

沼田真一編 築地書館



生態学辞典 増補改訂版

1974年12月1日初版発行

1983年7月20日増補改訂版発行

定価——8500円

編者——沼田真 (ぬまた まこと)

発行者——土井庄一郎

発行所——築地書館株式会社

東京都中央区築地 2-10-12 (〒104)

電話 東京(03)542-3731

振替 東京 1-19057

印刷——壮光舎印刷株式会社

製本——富士製本株式会社

製函——加藤製函印刷株式会社

装幀——杉浦康平+海保透

編者略歴——1917 茨城県に生まれる

1942 東京文理科大学理学部植物学科卒業

現在 日本植物学会会長・千葉大学名誉教授

住所 千葉市弁天町74-2

© MAKOTO NUMATA 1974
3545-283041-4818 Printed in Japan

緒言

日本生態学会が 1954 年に発足してまず手がけた事業が生態学用語集の刊行であった。すなわち 1955 年の総会で用語選定委員があげられ、最終的には 10 名の委員で 1960 年に一応の案ができ上がった。英和対訳の用語集をつくるために皆で意見をたたかわした頃のことをなつかしく思い出す。

しかしこの時は、基本的な用語に限ることとしたため収録語数は約 800 で、解説もつけられなかった。その後生物学辞典や生物学用語辞典のたぐいもいくつか出版されたが、生態学用語の収録はきわめて少なく専門の文献をよむ上では殆んど役に立たなかった。一方、生態学関係では J.R. Carpenter : An Ecological Glossary (1938) のほか、H.C. Hanson : Dictionary of Ecology (1962) なども出版され、他にも限られた分野の用語集 (たとえばソ連のグレベンシチコフのロシア語—英—独—仏語対訳の「地植物学用語集」(1965)) など、参考とすべきものがいくつか出たが、最近の広範囲の生態学文献をよむ上で、日本人としてはきわめて不便な状態であった。外国や日本の生態学のテキスト類もずいぶん多く、それらの索引などをうまく利用すると、かなり多くの用語の理解は可能ではあったが、1冊にまとまって日本人が利用できる生態学辞典は1冊もあらわれなかった。学生や初心の人から、何かそういうものはないかといわれても、前記のカーペンターやハンソンのものをすすめる以外になかった。

かつて生態学会で用語集の原案を検討していた頃、京都大学の森主一教授に、「沼田さん、ひとつ生態学辞典を編んでみてはどうか」とすすめられたことがあったし、事実私自身も文献をよむ合間合間に訳語のない生態学用語のカードをつくったりした時期があった。しかし辞典というのは想像以上に大事業で、そんな片手間のできるようなものではない。

ところが環境問題がやかましくなり、生態学に対する関心が従来より高まってくると、関連する文献が内外ともに多数出版されるようになり、多岐にわたる用語や概念についての理解のためには、どうしても日本語でよめる生態学辞典の必要性が痛感されるに至った。

その頃 築地書館では、「生態学研究シリーズ」の刊行を意図し、池沼・河川・海・森林・草地・耕地の全六巻をまとめるお世話を、私がすることになった。そしてそのシリーズが終了後、これらの著作内容を基本にし、その著者たちを中核にして辞典を編んでみてはという発想で、用語原案が作成された。一方、私は多くの専門書から用語を抽出し、当初1万語ほどの案をつかった。その考え方は、基本的には小項目主義とし、収録語数をなるべく多くして、外国文献(主として英語、できれば独・仏語も)をよむにあたって十分に立つ辞典にしたいというねらいであった。

しかし言葉は生きものであるから、死語もある一方、日に日に造語されるという事情もあり、多くいれるといってもじつはきりがない。そこで、ある程度しぼることとして7000語台に落ちついた(カーペンターやハンソンのものが3000語前後)。人名についても、生態学史上一定の評価をうけている人(原則として故人)については独立項目として解説した。

このようにして選ばれた項目を10名の各部門担当者(ならびに協力者)にお願いして、用語を整理し、解説して頂き、私は全般にわたって目を通して編集をすすめた。人間のつくるものであるから完璧ということはないであろうが、こうして成立した本書は、語数からいっても、またそれに対する最小限の解説という点でも、広く生態学を勉強しようとする学生・研究者・教師・技術者、さらに一般社会人にとって役に立つものであることを期待している。

そこでは、基礎的な生態学を中心としながらも、最近の人間生態学・環境問題あるいは境界領域などに関する重要な用語をも収録し、一般の生物学辞典・理化学辞典等にみられる用語はなるべく割愛した。訳語のないものには新訳をつけたものもある。横文字のままで片仮名書きすることですでに親しまれているものはそれに従った場合がある。いずれにしても、同意語・反意語・類語などは＝、⇒で示し、各項目間の有機的関連がつかめるようにした。解説文中に使用されている英語もすべて索引で引けるようにした。したがっ

て索引の収録語数は、本文中に立てた項目よりかなり多いはずである。

ここで特筆すべきことは、ドイツ語であるが、ちょうど折よく国際植生学会で来日中のウィーン農業大学の Wolfgang Holzner 博士(日本語のよみかきができ、かつ幅の広い生態学者で私の旧知)に検討をお願いしたところ快諾された。国際植生学会の途中でもゲラの内容についてよく討論をしたが、さらに全体のゲラを持ち帰って詳細な検討をされた上で届けて頂いた。ドイツ語はもちろんであるが、日本語の内容についても重要な指摘をいくつか頂いている。また現在在米中の大久保明博士(ワシントン大学客員教授)にもゲラの段階で目を通して頂き、有益な御助言を頂いた。両氏の御援助に厚く御礼申しあげたい。

辞典ではよく用語を複数形で示すことがあるが、本書では単数形を原則とした。ただ *bacteria*(単数 *bacterium*)のようなものは複数形が自然なので、その方を採用した。独・仏語で英語とほとんど同じサバンナ(*savanna*, *Savanne*, *savane*)、他感作用(*allelopathy*, *Allelopathie*, *allélopathie*)などのようなものは、独・仏をあげる必要はないというのがホルツナー博士の意見であったが、外国語に不慣れな日本人のために、結局はこれらものこすこととした。

はじめ英語から用語をひろい日本語訳をつけていったのに、辞典では日本語が見出しになっているための不都合が若干ある。たとえば *indicator* は指標あるいは指示薬であるが、日本語見出しだと二つにわけて、両方に同じ英語をあげることになる。*everglade* をはじめ沼沢地と訳したが、逆に沼沢地はエバグレードのみでなく *marsh*, *swamp*, *fen* などあるので、前者の訳語をエバグレードとした。これらの用語の混乱はなるべく避けるようにしたが、多少ひっかかるころがあった。浮遊生物とプランクトンのように両方とも同様につかうものでは、日本語の方を主項目とする一方、片仮名書きの方も項目として採用した。

まだまだ私どもの気づかない不備があるかとも思うが、これらは版を改めるさいに改善していきたい。別記一覧表に記した執筆者の方々のほか、築地

書館社長土井庄一郎，編集部長矢野賢治，編集部の角田暢夫，根本明，加瀬美恵子の諸氏，および多くの嘱託・アルバイトの諸氏との長期間にわたる苦闘から解放されるにあたり，一筆所感をのべて刊行の辞としたい。

昭和 49 年 7 月 23 日

編集責任者 沼 田 真

増補改訂にあたって

1974年に日本で最初の生態学辞典を刊行したが、それからすでに9年を経過した。その前に1971年から私の監修した「生態学研究シリーズ」全6巻を刊行し、それが辞典刊行の引きがねになったことを思い出す。外国でもいくつかの生態学用語集や簡単な辞典はでているが、それらのどれにも負けない内容の豊富なものとするのをねらった。

基本的には小項目主義とし、収録語数をなるべく多くして、外国文献を読むに当たっても十分役に立つ辞典にしようという狙いであった。

しかし言葉は生きものであるから、死語もでる一方、日に日に造語されるという事情もあり、多く入れるといってもじつはきりがない。そこで、ある程度しぼることとし7,000語に落ちついた。

そこでは、基礎的な生態学を中心としながらも、最近の人間生態学・環境問題などに関する重要な用語を収録し、一般の生物学辞典・理化学辞典等にみられる用語はなるべく割愛した。訳語のない外国語には新訳をつけた。解説文中に用いた英語もすべて索引で引けるようにした。したがって索引に収録した語数は、立てた項目よりかなり多い。

このようにして成立した生態学辞典であるが、その後時間もたったし、しばらく絶版であったので、今日、新たに数名の方に編集執筆の御協力をお願いし、前回御執筆頂いた方々とともに内容の再検討を行い、一部の用語を削除する一方、必要度の高い新しい用語の採択、解説の修正、追加などを行い、こうして500余の増補・追補項目を入れて、増補改訂版が刊行されることになったのである。この生態学辞典増補改訂版は、生態学を勉強しようという学生や一般社会人はもとより、教師、研究者、技術者などにも広く役に立つものと確信する。

1983年4月

編集責任者 沼田 真

執筆・主要分担範囲一覧

(50音順・○印は執筆分担責任者)

- 飯泉茂(東北大学)———草地・耕地・サバンナ・砂漠・気象・
気候・その他
- 伊谷純一郎(京都大学)———動物社会学・動物地理学・人間生態学・
大塚柳太郎(東京大学) その他
西田利貞(東京大学)
- 巖俊一(名古屋大学)———個体群生態学・有害動物防除・生活史・
小野勇一(九州大学) 行動学・動物生産・その他
日高敏隆(東京農工大学)
前田憲彦(城西歯科大学)
宮田正(名古屋大学)
- 手塚泰彦(東京都立大学)———微生物生態学・生理生態学・環境生態
学・その他
- 中村純(高知大学)———古生態学・遺伝生態学・種生態学・進
化学・その他
- 沼田真(千葉大学)———方法論・生態学史・雑草学・都市生態
大沢雅彦(東京大学) 系・その他全般
太田邦昌(東京経済大学)
- 原田英司(京都大学)———海洋・海洋汚染・動物地理学・その他
- 水野寿彦(大阪教育大学)———陸水・陸水汚染・その他
- 宮脇昭(横浜国立大学)———植物社会学・植物地理学・その他
- 依田恭二(大阪市立大学)———森林・熱帯・山岳・ツンドラ・極地・土
壌・種内競争・生態系・生産・その他

凡例

原則

1. 小項目主義による。
2. 各項目は、表音見出し・項目名・外国語(英語・独語・仏語・ラテン語・その他)、および解説・参照項目名により構成する。人名項目は、姓の表音見出し・原綴(姓・名)・生没年・解説・主著により構成する。
3. 表記は当用漢字・現代かなづかいによるが、必要に応じて当用漢字以外のものを使用する。送りがなは、誤読のおそれのある例外を除いて、許容される最短縮形を送る。
4. 学術用語については学界の慣用語を優先するが、必要に応じて新用語を積極的に収録する。
5. 外国語中・解説中の英語および人名をすべて巻末索引に収録する。

表音見出しの表記

1. カタカナを用い、現代かなづかいに従って表記する。
2. 長音はすべて長音符‘ー’によって示す。
例：〈濃縮係数〉→〈ノーシュクケイスー〉、〈平行群集〉→〈ヘイコーグンシュー〉
慣用表記の定着している外国人名などの固有名詞については例外とする。
例：〈Thornthwaite の気温効率〉→〈ソンスウェイトノキオンコーリツ〉
3. 外来語・外国人名などの表記については、少数の例外を除いて、英語の‘v’→‘ヴ’、‘f’→‘フ’とする。
例外：‘ビタミン’ ‘ウィルス’ はか
4. アルファベット表記は、次の表音による。
A(エー)、B(ビー)、C(シー)、D(ディー)、E(イー)、F(エフ)、G(ジー)、H(エッチ)、I(アイ)、J(ジェー)、K(ケー)、L(エル)、M(エム)、N(エヌ)、O(オー)、P(ピー)、Q(キュー)、R(アール)、S(エス)、T(ティー)、U(ユー)、V(ヴィー)、W(ダブリュー)、X(エックス)、Y(ワイ)、Z(ゼッド)。

算用数字と組みになる場合は次のように扱う。

例：〈C₃ 型植物〉→〈シースリーガタショクブツ〉, 〈A₀₁ 層〉→〈エーゼロワンソー〉

項目の配列

1. 表音見出しの 50 音順による。
2. 拗音・促音は直音の次の音順とし、撥音は 50 音の最後とする。
3. 清音→濁音→半濁音の順とする。
4. 長音はその部分に長音のない表記の次の音順とする。
例：〈コード〉→〈コードー〉→〈コドクソー〉→〈コードクソ〉の順
5. 同音の場合は、項目名について 1 字目から順次比較し、字画数の少ないものを先とする。
例：〈コードケイ〉(光度計)→〈コードケイ〉(高度計)の順

項目名

1. ひらがな・漢字・算用数字による表記とする。
2. 表音見出しと同一のカタカナ表記を含むものは、その部分を——で示して省略する。
3. 理解を助けるため、当用漢字以外の漢字を用いることがある。
4. 同一意義をもつ項目を二つ以上並列させることがある。
例：〈受粉, 授粉〉
5. 外国人名は原綴を用いるが、ロシア人名・ギリシア人名はローマ字綴りに書き替える。日本人名は姓・名ともゴシック体にし、外国人名は姓のみポールド体にする。

外国語

1. 全項目に、対応する外国語を収録し[]内に記す。英語以外に、独語・仏語・ラテン語・その他を併記することがある。
2. 英語・ラテン語・独語・仏語の順で並列し、英語・ラテン語は無印、独語は①, 仏語は②で示す。
3. 同一項目名に二つ以上の英語(独語・仏語など)がある場合は、カンマで切って併記する。

4. 同一綴りを繰返す場合は、次の要領で略記する。

例：〈tree line, t. limit〉, 〈stabilized dune, d. fixation〉

5. ()で括った部分は省略可能であることを示す。

例：〈allogen(et)ic〉では *allogenetic* と *allogenic* の両方とも用いられる。
 〈(root) nodule bacteria〉では *root nodule bacteria* と *nodule bacteria* の両方とも用いられる。

6. 名詞については、原則として単数形を採用する。

7. 項目の解説が①②…と区別されていて対応する外国語が異なるときは、それぞれの外国語の前に①②…を付して区別する。

解説

1. 同一項目であっても内容が著しく異なる場合は①②…と区別する。

2. 解説内容を細かく分けて記すときは(1)(2)…を用いる。

3. 同格の名称などは、原則として中黒‘・’で列記する。

4. 解説文中の外国人名は原綴を用いる。人名の後の()内の数字は、当該事項研究の西暦年号を示す。

5. 人名項目の姓名の次に、‘生年～没年’を記す。‘没年’が記されていない場合は、生存中である。解説末尾に〈主著〉として、主な単行本・研究論文を原則として初版・初出版年とともに示す。

参照項目

1. ‘=’ は、解説のなされている同義項目への送りを示す。

2. ‘⇒’ は、解説のなされている関連項目(類似・付帯・反義項目など)への送りを示す。

3. 参照項目が二つ以上あるときは、同義項目→関連項目の順に列記し、それぞれの表音見出しの50音順によって配列する。

「増補改訂」について

1. 増補改訂の記述、表記などはおおむね旧版の方法にしたがった。

2. 項目名のあたりに付した‘◆’は、その項目についての追記が、巻末の増補の部にあることを示す。

3. 欄外の‘○’を付した項目は、増補の部にあることを示す。

x

4. ‘＝’ および ‘⇒’ のあとに付した ‘○’ は，その項目が増補の部にあることを示す。

ア

アイエッチディー [IHD; International Hydrologic Decade] = 国際水文学十年計画

アイサツコードー 挨拶行動 [greeting behaviour] 一つの社会集団の中で個体間の緊張を解く社会行動の一つ。2個体が一定期間以上別行動をとることにより緊張が生じ、またその緊張を解消する行動が穏やかな形で行われたとき、これを挨拶行動と呼ぶ。本来、有和行動から生じたものと考えられるが、チンパンジーやヒトでは、すでにそれとは独立した動機づけの機構をもっていると考えられる。

アイシーエスユー [ICSU; International Council of Scientific Unions] 国際学術団体連合。イクスと呼ばれる。

アイジーワイ [IGY; International Geophysical Year] = 国際地球観測年

アイデルタシスー — 指数 [I_s -index] 分布集中度の指数として森下 (1959) が導いたもので：

$$I_s = \frac{q \sum_{i=1}^q x_i(x_i-1)}{T(T-1)}$$

で与えられる。ただし、 q ：区画数、 x_i ： i 番目の区画内の個体数 ($i=1, \dots, q$)、 T ：総個体数。これは Simpson (1949) の多様度の指数に区画数 q を掛けたもので、 I_s の値は Poisson 分布では 1、集中分布では 1 より大、一様分布では 1 より小となる。標本についての統計量として提案されたが最近、有限および無限母集団における I_s のパラメーター (I_s, I_s^*) も導かれ、各種サンプリング法や群集構造の解析への応用など多方面に発展している。

アイビービー [IBP; International Biological Programme] = 国際生物学事業計画

アイマー Eimer, Theodor, 1843~1898 ドイツの動物学者。チュービンゲン大学教授。自然淘汰説に反対して、定向進化説を提唱し

た。

アウストラロピテクス [*Australopithecus*] 洪積世初期から中期にかけて、旧大陸の各地に生息していた猿人。現在 *Australopithecus africanus*, *A. robustus* の 2 種に分類されている。頭蓋容量はゴリラと直立原人との中間に位し、犬歯は突出していない。不完全ではあるが、習慣的な 2 足歩行をしていたと考えられる。サバンナに生息し、礫石器 (オールドワンカルチャ) を使い、食性は雑食性であったとみられる。

アエイキョーシュ 亜影響種 [sub-influent, s. species] ⇨ 影響種

アエンガンタイ 亜沿岸帯 [sublittoral zone, s. region, eprofundal r. ① Sublittoralzone, sublittoraler Gürtel ② zone sublittorale] 底生区の生態的区分帯の一つ。

① 真沿岸帯に引続くものとしていうときには、深さ 30~40 m から陸棚外縁までの部分。② 潮間帯を意味する littoral zone に引続くものとしていうときには、低潮線から陸棚外縁までの部分。水の流動・水温・溶存酸素量などの物理的・化学的变化が少なくなるので、有機物の破砕された泥や貝殻が堆積する。とくに貝類の死骸や破片の堆積した部分を貝殻帯 shell z. という。

アエンショクセイ 亜鉛植生 [zinc vegetation ① Galmeivegetation] 亜鉛土壌に特異的に成立する植物群落。アエンズミレが有名。

アカイガンセイ 亜海岸性 [submarine] 河口洲周辺や潟湖などの淡水域や海岸付近だけでなく、かなり内陸にも分布しているような植物についていう。

アカイネトン [akineton] 無力浮遊生物。浮遊生物のうちで浮遊卵のように運動力を欠くもの。

アカシオ 赤潮 [red tide, akashio, r. water] 苦潮・苦水・青潮といわれるもの

も含む。ある種の浮遊生物が限られた表面水域内で急激に増殖して、水の色が変るほどになる現象。そのような浮遊生物には、渦鞭毛藻類・珪藻類・藍藻類・纖毛虫類などが知られている。

アカミ 赤味 [duramen] = 心材

アカユキ 赤雪 [red snow, blood s.] 雪や氷の表面に増殖する藻類による着色現象で、高山や極地の雪渓や氷河で早春に見られる。*Chlamydomonas nivalis* が最も有名であり、赤色色素の haematochrome が chlorophyll を覆うため赤色となる。雪の華 snow-bloom の一例で、他に 黄雪・緑雪・褐雪なども知られている。

アカンタイ 亜寒帯 [subarctic zone, subpolar z.] 亜北極の地帯。温帯と寒帯の間にある気候帯。月平均気温 10~20°C の月が1~4カ月あり、他の月はより低温である地帯。低温であるが、短い夏があるので生育期間の短い植物が育ちタイガなどの森林を形成する。湿潤気候では常緑針葉樹林帯が、半乾燥気候では落葉針葉樹林帯が対応する。林学では亜寒帯は寒帯に含めることもあり、その場合はタイガは寒帯林に含まれることになる。⇒亜極地方

アカンタイリン 亜寒帯林 [subarctic forest (zone), boreal f.] 亜寒帯に成立する森林の総称であるが、森林帯として用いるときには、ふつう常緑針葉樹林帯と同義に用いる。寒帯林ということもあるが、植生帯区分の上からは正しくない。

アカンボウ [infant] アカンボウ。哺乳類の発育段階の一つ。一般に母親から授乳され保護される段階。高等な霊長類では母親に運ばれる。

アキノ 秋の [serotinal, autumnal] とくに秋の季節景観に用いる。

アキョクソー 亜極相 [subclimax, serclimax ① Subklimax ② sousclimax] 野火・採草・放牧・伐採・野生動物による食害など気候因子以外のファクターが加わって極相に達する以前の段階で遷移が阻止され、見

かけ上安定な群落(群集)を作っているもの。採草地のかやば、放牧地の草原、薪炭林などの人為によるもの、強い強風下にある海岸低木林のように自然条件によるものなどがある。

アキョクチホー 亜極地方 [subpolar region] Köppenらの気候型の一つである亜極地気候の地帯。ほぼシベリア・アラスカ・カナダの北方針葉樹林帯(タイガ)に一致する。⇒亜寒帯

❖ **アクシュー プッシツ 悪臭物質** [malodorous substance] 不快な臭いの原因となり、生活環境を損なうおそれのある物質の総称。公害のうちでも悪臭物質は最も複雑で、代表的な成分として窒素・硫黄を含む化合物や高級脂肪酸などがある。魚腸骨処理・畜産関係・塵埃処理・食料品加工・パルプ製造・石油精製・石油化学などの工場・処理場の周辺は著しい。脱臭法として、燃焼・吸着・酸化・水洗等の方法が用いられる。

アクメ [acme] ある生物の系統発生で初期から絶滅するまでの間の最も繁栄する時期あるいはその現象。この時期には形態は比較的安定で個体数も多く、地理的分布も広い。最盛期。⇒ヘメラ

アクリターチ [Acritarch] 淡水または海水性堆積物に含まれる所属不明の一群の微化石。

アグレステ [agreste] ブラジルの森林帯とカーチングの移行帯, zona do agreste ともいう。雨量は一般に 600~900 mm。ワタ・タバコ・タビオカ・サイザルなどを産する。森林帯のココヤシに対してカトレ catolé (*Cocos picrophyllis*) というヤシが指標になる。

アゲンケイ 亜群系 [subformation] 相観による群落区分・群系の下位単位。⇒群系

アゲンシュー 亜群集 [subassociation ① Subassoziation] 植物社会学的な群落単位。群集の下位単位。識別種(区分種)によって決められる。⇒群集

アコーザン 亜高山 [subalpine] ⇒亜高山帯

アコーザン タイ 亜高山帯 [subalpine zone] 温帯の山岳を基準にして作られた植物の垂直分布帯で、山地帯と高山帯の間にあり、亜寒帯気候帯に相当する。暖かさの指数で15~45(55) m. d. (月・°C)。常緑針葉樹林帯で、日本の本州ではウラジロモミ・シラベ・トウヒ・アオモリトドマツなどが優占する森林帯をあてることが多い。

アコーセツタイ 亜恒雪帯 [subnival zone, s. belt] 高山帯と恒雪帯との間をこのように呼ぶ場合がある。=亜氷雪帯

アサンチタイ 亜山地帯 [submontane zone] ヨーロッパアルプスなど、温帯の山岳を基準にして作られた植物の垂直分布帯のうち最も低い位置にあるもので、狭義の暖温帯気候帯上部に相当する地帯。暖かさの指数で85~140 m. d. (月・°C)。日本では照葉樹林帯の上部、アカガシ・シラカシ・アラカシ等のカン類の優占する森林帯にあたる。丘陵帯。

アジア エチオピアク ——区 [Oriental and Ethiopian realm] 旧北区の南とつながるアフリカとアジアの動物地理区。

アシェブ [acheb, asheb] サハラ砂漠で雨のあとに一時的にできる一年生草本植物。

アシャカイセイ 亜社会性 [subsocial] 家族制や年齢集団などは見られても、それ以上の社会的な構造・組織・関係は分化していない状態。⇒前社会性

アショーサンサンカサイキン 亜硝酸酸化細菌 [nitrite-oxidizing bacteria] ⇒硝化作用

アシワツケ 足環つけ [banding, ringing] 鳥類や哺乳類の個体にアルミニウム製やモネル合金・プラスチック製などの足環を付けて個体識別する方法。標識再捕によって行動範囲・渡りの研究や個体数あるいは生存率の推定のために用いられる。

アシワツケホー 足環つけ法 [ringing method] ⇒足環つけ

アスピーテ [aspite, shield volcano] ①Aspite, Schildvulkan ②Aspite, volcan en bouclier] 粘性の低い玄武岩質の

溶岩流により形成された傾斜の緩い火山。楕状火山。

アセ 汗 [sweat ①Schweiss ②Sueur] ヒトの汗は比重1.002~1.006の液体で、その組成は99%が水、そのほかに少量のNa・Cl・K・尿素などを含む。汗は汗腺を通して分泌されるが、その機構としては、高温に曝露されることによる温熱性発汗と、精神的興奮による精神性発汗とがある。前者は手掌・足底を除く全身にみられ、体温調節に関係している。後者は手掌・足底・腋窩にのみみられ、体温調節とは関係がない。ヒト以外の恒温動物では、足趾(ネコ・イヌ)や、鼻の先(ウシ・ブタ)からだけ発汗するもの、また全く発汗しないもの(ヤギ・ウサギ)、全身から発汗するもの(ウマ・ロバ)など様々である。

アセイタイ 亜成体 [sub-adult] ネズミ類などの哺乳類で、体長・体重・毛皮の色その他では成体とみなしうるが、性的には未成熟の個体。昆虫類ではカゲロウ類 Ephemeroptera にみられる特殊な変態(前変態 prometamorphosis) の1ステージを意味し、幼虫と成虫の間にあって成虫とほとんど同じ形をもつステージを指す。亜成虫。⇒ワカモノ

アセチルブロマイドホー ——法 [acetyl-bromide method] 地質年代の古い材化石ほど、アセチルブロマイド可溶物が少ないことを利用した年代測定法。

アソシエーション [association ①Assoziation] Clements の遷移説に基く群落区分の単位。極相である群系を構成する単位。群系に対応する大気候に対し地域的な気候の差異に応じて形成される気候的に安定な個々の単位をいう。1ないしそれ以上の優占種によって代表される下位の単位から成り、それらはコンソシエーション・ファシエーションと呼ばれる。たとえば極相としてのブナ林は冷温帯落葉樹林群系のアソシエーションである。極相植物のアソシエーションに対して途中相の対応する群、たとえばブナ林に対してススキ草原はアソシエーションと呼ばれる。

⇒群集

アソシーズ [associes] 群落区分の単位。アソシエーションに対応する単位で、遷移の途上にある不安定な群落単位を指す。

アソシール [associule] アソシーズに対応する遷移途中にある不安定な微生物群集。Clementsの用語。⇒アソシーズ

アソビ 遊び [play ①Spiel ②jeu] 鳥類・哺乳類の一般に未成熟個体に見られる現実的機能のない行動群。アカンボウ段階のひとり遊び self-play と、コドモ段階以降の社会的遊び social play とがある。いずれも個体の身体的発育を促すが、後者はそれにとどまらず、個体の社会化に役立つ。ヒトはオトナになっても遊ぶ例外的な種である。

アタイリクキコー 亜大陸気候 [subcontinental climate ①subkontinentale Klima] 夏期と冬期の気温差が激しく、無霜期間が短い気候。

アタタカサ ノ シスー 暖かさの指数 [warmth index] 吉良 (1949) の考案した積算温度の一つで、植物の生育温度を日平均気温 5°C 以上とみなし、各月の平均気温から 5°C を引いて 1 年間合計した値。月・°C (m. d. ; month degree) で示す。暖かさの指数で植物帯を表すと、熱帯多雨林帯 240 m. d. 以上、亜熱帯多雨林帯 180~240、照葉樹林帯 85~180、落葉広葉樹林帯 (45~55)~85、常緑針葉樹林帯 15~(45~55)、ツンドラ帯 0~15 となる。温度指数。

アーチダム [arch dam]

アチチューカイセイ 亜地中海性 [sub-mediterranean ①Submediteranien] ⇒地中海気候

アッシュク 圧縮 [compression] 種間競争によって生態的地位(ニッチ)の幅が狭まること。

アッシュク カセツ 圧縮仮説 [compression hypothesis] 競争中の種は、一定の生育地(すみ場・ハビタート)内で食う食物の種類数を減らすより、生育地の数のほうを減らす傾向があるという仮説。

アツジョー 圧条 [layering ①Schicht-

ung ②Stratifikation] = 取木

アツタイニンセイ 圧耐忍性 [barotolerant] 常圧下だけでなく高圧下でも生息すること。

アツマキ 厚播き [heavier seeding]

アテ あて [compression wood, tension w. ①Druckholz, Zugholz ②bois de compression, b. de traction] 樹幹に一方方向の圧力または張力が常に作用している場合に、偏心成長に伴って現れる異状構造材。針葉樹では圧縮側(谷側、風下)に生じるため、compression wood といわれ広葉樹では引張側(山側、風上)に生じるため、tension w. といわれる。針葉樹では濃色を呈し、木化度が高く、もろい。広葉樹では導管の発達が悪く木化度が低い。

アデイトン 亜泥炭 [peaty clay, organic silt ①Mudde ②vase de marais] 泥炭中に無機質の土砂が混っている土層。

アトサク 後作 [succeeding crop]

アトハマ 後浜 [back shore] 海岸地形の高潮汀線と海岸線との間を指す。浜段丘はこれにあたる。

アトモメーター [atmometer] = 蒸発計

アトラントキ —— 期 [Atlantic period, Atlanticum] Blytt-Sernander の後氷期編年による一時代で、約7000~4000年前の間。現在よりやや温暖多湿な気候で、ヨーロッパ中央部ではこの時代に気候の極相林が初めて形成された。海進時代でもある。同年代を示す時代名として世界各地で用いられる。

アナログ ケイサンキ —— 計算機 [analogue computer ①Analogrechner ②calculateur analogique] 連続的の物理信号によって数値を表す計算機。

アナログシンゴ —— 信号 [analogue signal ①Analogsignal ②signal analogique] 連続量の大きさで示される信号。

アナンキョクテキ 亜南極的 [subantarctic ①subantarktisch] 南半球の高緯度地方に特有の、の意。硬団塊植物群系・亜極地ハイデ植生などがみられる。